

第 62 回名古屋春栄会
演目のあらまし

令和3年8月1日

名古屋春栄会事務局

目 次

高砂（たかさご）	1
経政（つねまさ）	2
船弁慶（ふなべんけい）	3
殺生石（せっしょうせき）	4
七騎落（しちきおち）	5
放下僧（ほうかそう）	6
邯鄲（かんとん）	7
葵上（あおいのうえ）	8
加茂（かも）	9
室君（むろぎみ）	10
鶺ノ段（うのだん）〔鶺飼（うかい）〕	11
山姥（やまんば）	12
殺生石（せっしょうせき）	13
千手（せんじゅ）	14
岩船（いわふね）	15
絃上（けんじょう）	16
〔能のミ二知識	17〕

このリーフレットは、第62回名古屋春栄会の演目を解説したものです。

演目の記載順は、番組の順です。

詞章については、金春流の謡本から転載しました。

高砂（たかさご）

【分 類】初番目物（脇能＝男神物） *神舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇事なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいただき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声ぞ楽しむ。さっさっの声ぞ楽しむ。

経政（つねまさ）

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作者】不詳

【主人公】シテ：平経政の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

京都の仁和寺、御室御所〔おむろごしょ〕の守覚〔しゅがく〕法親王は、琵琶の名手である平経政を少年の頃から寵愛されていました。ところが、このたびの一ノ谷での源平の合戦において、経政が討ち死にしたので、生前、彼にお預けになったこともあった「青山〔せいざん〕」という銘のある琵琶の名器を仏前に供え、管絃講〔かげんこう〕を催して回向するように行慶〔ぎょうけい〕僧都に仰せつけになります。行慶は、管絃を奏する人々を集めて法事を行います。すると、その夜更けになって、経政の亡霊が幻のように現れ、御弔いのありがたさに、ここまで参ったのであると僧都に声をかけます。そして、手向けられた琵琶を懐かしく弾き、夜遊の舞を舞って興じます。しかし、それもつかの間、やがて修羅道の苦しみに襲われ、憤怒の思いに戦う自分の姿を恥じ、灯火を吹き消して闇の中に消え失せます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

あら恥かしや嗔恚の有様。はや人々に見えけるか。あの灯火を消し給えとよ。灯火を背けては。灯火を背けては。ともに憐れむ深夜の月をも。手に取るや帝釈修羅の。戦いは火を散して。嗔恚の矢先は雨となって。身にかかれば払う剣は。他を悩し我と身を切る。紅波はかえって猛火となれば。身を焼く苦患恥かしや。人には見えじものを。あの灯火を消さんとして。その身は愚人。夏の虫の。火を消さんと飛び入りて。嵐とともに灯火を。嵐とともに。灯火を吹き消して。くらまぎれより。魄霊は失せにけり。魄霊の形は失せにけり。

船弁慶（ふなべんけい）

【分類】五番目物（切能） ＊中ノ舞、舞働

【作者】観世小次郎信光

【主人公】前シテ：静御前（面・小面）、後シテ：平知盛の怨霊（面・怪士）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

源義経は、平家追討に武功を立てますが、戦が終わると、かえって兄頼朝から疑いをかけられ、追われる身となります。義経は、弁慶や従者と共に都を出、攝津国（兵庫県）大物浦から西国へ落ちようとしています。静御前も、義経を慕ってついて来ますが、弁慶は時節柄同行は似合わしくないから、都へ戻すように義経に進言し、了承を得ます。弁慶は静を訪ね、義経の意向を伝言しますが、静は弁慶の計らいであろうと思い、義経に逢って直接返事をするといひます。義経の宿に来た静は、直接帰京をいわたされ、従わざるを得ず、泣き伏します。名残りの宴が開かれ、静は、義経の不運を嘆きつつ、別れの舞を舞います。やがて出発の時となり、涙ながらに一行を見送ります。

<中入>

弁慶は、出発をためらう義経を励まして、船頭に出発を命じます。船が海上に出ると、にわかに関風が変わり、激しい波が押し寄せて来ます。船頭は必死に船をあやつりますが、吹き荒れた海上に、西国で滅亡した平家一門の亡霊が現れます。中でも平知盛の怨霊は、自分が沈んだように、義経を海に沈めようと長刀を持って襲いかかって来ます。義経は少しも動ぜず戦いますが、弁慶は押し隔てて、数珠を揉んで祈ります。祈られた亡霊は、しだいに遠ざかり、ついに見えなくなります。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

そもそもこれは。桓武天皇九代の後胤。たいらの知盛。幽霊なり。あら珍らしやいかに義経。思いもよらぬ。浦浪の。声をしるべにいで舟の。声をしるべにいでぶねの。知盛がしずみしその有様に。又義経をも海に沈めんと。いう浪に浮かめる長刀取直し。巴浪の紋あたりを払い。うしおをけたて悪風を吹きかけ。まなこもくらみ。心もみだれて。前後を亡ずるばかりなり。その時義経すこしもさわがず。うちものぬき持ちうつつの人に。向うが如く。ことばをかわし戦い給えば。弁慶おしへだて。うち物わぎにて叶うまじと。数珠さらさらとおしもんで。東方降三世南方軍陀利夜叉。西方大威徳。北方金剛夜叉明王。中央大聖不動明王のさっくにかけて。祈りいのられ悪霊次第に遠ざかれれば。弁慶舟子に力をあわせ。お舟を漕ぎのけみぎわによすれば、なお怨霊は。したい来たるを。追っばらい祈りのけ、また引く汐にゆられ流れ。またひく汐にゆられ流れて。あと白波とぞ。なりにける。

殺生石（せっしょうせき）

【分類】五番目物（切能＝鬼畜物）

【作者】日吉安清

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、後シテ：野干の精（面・小飛出）

【あらすじ】（独吟〔クセ〕…下線部）

玄翁という高僧が、能力と奥州から都へ上る途中、下野国（栃木県）那須野の原へさしかかります。空を飛ぶ鳥が、とある石の上を飛ぶと落ちるので、不審に思っ
て見ていると、一人の里の女が現れ、その石は殺生石といい、人畜を害する恐ろしい
石だから、近寄らないようにと注意します。玄翁がその由来を尋ねると、女は次の
ような話をします。昔、鳥羽院につかえていた玉藻ノ前は、才色兼備の女性で、帝
もお気に入りであったが、実は化生の者であった。帝を悩ませようと近づいたが、
その正体を見破られたのでこの野に逃げたが、殺されたため、その魂が殺生石にな
ったのだと詳しく語ります。そして、実は自分はその石の魂であるとあかし、夜に
なれば懺悔のため姿を現すと言いつつ、石の中に隠れます。

<中入>

玄翁が石に向かって仏事をなし、引導を与えると、石は二つに割れ、中から野干（狐）
が現れます。野干は、天竺（インド）では斑足太子の塚の神、大唐（中国）では幽
王の後褒姒となって世を乱し、日本へ渡り、この国をも滅ぼそうと玉藻ノ前という
美女に変じて宮廷に上ったが、安倍泰成の祈祷で都を追われ、その後、この野に隠
れ住んだが、狩り出されて遂には射殺され、その執心が殺生石となっていたのでし
た。しかし、野干（狐）は、今、あなたの供養を受けたので、以後、悪事はしないと
誓って消え失せます。

【詞章】（独吟〔クセ〕の部分の抜粋）

ある時帝は。清涼殿に御出あり。月卿雲客の。堪能なるを召し集め。管絃の御遊あ
りしに。頃は秋の暮。月まだ遅き宵の空の。雲の気色すさまじく。うちしぐれ吹く
風に。ご殿の燭消えにけり。雲の上人立ち騒ぎ。松明とくと進むれば。玉藻の前が
身より。光を放ちて。清涼殿を照らしければ。ひかり大内にみちみちて。畫図の屏
風萩の戸。闇の夜の錦なりしかど。光に輝きてひとえに月のごとくなり。帝それよ
りも。ご悩とならせたまいしかば。安倍の泰成うらなう。勤状に申すよう。これ
はひとえに玉藻の前が所為なれや。王法を傾けんと。化生して来たりたり。調伏の
祭あるべしと。奏すればたちまちに。叡慮も変わりひきかえて。玉藻化生をもとの
身に。那須野の草の露と。消えし跡は。これなり。

七騎落（しちきおち）

【分類】 四・二番目物（侍物） *男舞

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：土肥実平（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

治承4（1180）年8月、石橋山の合戦に敗れた源頼朝は、他日を期して安房上総の方へ落ちのびようとしています。そして、一行の軍師格の土肥実平に、船の用意を命じます。ところが、いざ漕ぎ出そうとして船中を見ると、主従の人数が八人でした。頼朝は、祖父為義が九州へ落ちた時も八騎であり、父義朝が近江へ敗走した時も八騎であったことを思い出し、不吉の数だから、一人を降ろすように命じます。実平は、いずれも忠義の者ばかりで選びかねた末、最長老の岡崎義実を降ろそうとしますが、彼は承知しません。やむなく我が子遠平を下船させ、一行は親子の別れに同情しつつも、船を沖に進めます。遠ざかる陸を見ると、敵の数は多く、遠平は討死するに違いないと、実平は心ひそかに悲しみます。翌日、沖合で和田義盛が頼朝の船を捜し出し、声をかけてきます。実平は義盛の心を試すため、主君はいないと偽ります。すると、義盛はそれでは生きているかいかないと、腹を切ろうとするので、これを止め、近くの浜辺に船を寄せて頼朝に対面させます。そこで、義盛は実平に向い、遠平は自分が助けて来たと言い、父子を引き合わせます。実平は夢かとはばかり喜び、父子は抱き合います。そして一同は酒宴を催し、実平はすすめられて喜びの舞を舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

かくて時日をめぐらさず。かくて時日をめぐらさず。西国のつわもの馳せ参ずれば。ほどなくおん勢二十万騎になり給いつつ。たなごころにて治め給えるこの君の御代の。めでたきためしも実平正しき忠勤の道にいる。実平正しき。忠勤の道にいる。弓矢の名をこそあげにけれ。

放下僧（ほうかそう）

【分類】 四番目物（現在物） *羯鼓〔かっこ〕

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：禅僧・小次郎の兄（直面）、後シテ：小次郎の兄（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

下野国（栃木県）の住人、眞木野左衛門は、相模国（神奈川県）の利根信俊と口論の末、打ち果たされてしまいます。その子の眞木野小次郎は、父の無念を思い、信俊を敵とつけ狙いますが、相手は大勢、こちらは唯一人で思うにまかせません。そこで、幼少から出家している兄に力を求めるべく、禅学修行中の学寮へ訪ねて行きます。そして一緒に仇討に出立しようと促しますが、兄は出家の身を思い、ためらいます。小次郎は、親の敵を打たぬのは不孝であるといい、母を殺した虎をねらって、百日、野に出、虎と見誤って大石を射たが、一心が通じて矢は突き立ち、血が流れた、という中国の故事を物語ります。兄も弟の熱意に動かされ、仇討に同意します。そして二人は談合の末、敵に近寄る方便として、当時流行の放下僧と放下に変装して、故郷に名残りを惜しみつつ出発します。

<中入>

一方、利根信俊は夢見が悪いため、瀬戸の三島神社への参詣を志します。道中、放下が来るというので、従者が旅の徒然にと呼び寄せます。小次郎兄弟は、浮雲・流水と名乗り、信俊に近づきます。そして、兄は自分の持つ団扇のいわれを、弟も携えた弓矢のことを面白く説きます。つづいて禅問答に興じ、曲舞や羯鼓、小歌などさまざまな芸を見せていきます。そして、相手の油断を見すまし、兄弟ともども斬りかかって、首尾よく本望をとげます。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

青陽の春のあしたには。谷の戸出づる鶯の。凍れる涙とけそめて。雪消の水のうたかたに。あい宿りする蛙の声。聞けば心のあるものを。目に見ぬ秋を風に聞き。萩の葉そよぐ古里の。田面に落つる雁鳴きて。稲葉の雲の夕時雨。妻恋いかぬる小牡鹿の。たたずむ月を山に見て指を忘るる思いあり。由良の港の釣舟は。魚を得て釜を捨つ。これを見れかれを聞く時は。峰の嵐や谷の声。夕べの煙朝霞。みなこれ。三界唯心の。ことわりなりとおぼしめし心を悟り。たまえや。

邯鄲（かんとん）

【分類】四・五番目物（遊樂物・唐物） *楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：盧生（面：邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

中国、蜀の国の盧生という青年が、人生に迷いを感じ、楚の国羊飛山に住む賢者に人生とは何か、問うてみようかと旅に出ます。途中、邯鄲の里へ着き、一見の宿屋に泊まります。その宿の女主人は、かつて仙人の法を使う人を泊めたときにそのお礼にと不思議な枕をもらいました。その枕を使って寝ると、夢によって悟りを開くというのです。女主人は盧生の素性や旅の目的などを聞くと、食事の用意が出来る間、しばしその枕を試してみるように勧めます。そこで盧生も、その枕を借りて一眠りすることにします。うとうとすると起こす人がいます。楚の国の帝が位を盧生に譲るといふ勅使です。盧生は勅使に促されて、天にも昇る心地で輿に乗って宮殿に赴き、王位につきます。それから50年酒宴は続き、盧生も歓喜の舞をまい、栄華を極めた毎日を送ります。と、その時、宿の女主人が粟の飯が炊けたと起こしに来ます。目を覚ました盧生は、全ては夢であったのかと、しばらくは呆然としますが、人生何事も一炊の夢と悟り、不思議な枕に感謝しながら、自分の故郷である蜀の国へと帰っていくのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

謡う夜もすがら。謡う夜もすがら。日はまた出でて。明きらけくなりて。夜かと思えば。昼になり。昼かと思えば。月またさやけし。春の花咲けば。紅葉も色濃く。夏かと思えば。雪も降りつつ。四季おりふしは目の前にて。春夏秋冬万木千草も。一時に花咲けり。面白や。不思議やな。かくて時過ぎ頃去れば。五十年の栄華も尽きて。誠は夢の内なれば。女御更衣。百官卿相千戸万户。従類眷属宮殿楼閣。皆消え消えと失せ果てて。ありつる邯鄲の枕の上に。眠りの夢は。覚めにけり。

葵上（あおいのうえ）

- 【分類】 四・五番目物（怨霊物）
【作者】 世阿弥（古能を改作）
【主人公】 前シテ：六条御息所の生霊（面・泥眼）
後シテ：六条御息所の怨霊（面・般若）

【あらすじ】（独吟の部分…下線部）

左大臣のご息女で、光源氏の正妻である葵上が物怪に悩まされ寝込んでいるので、貴僧や高僧を召して加持祈祷を行ったり、さまざまな治療を施してみるが、いっこうに効き目がなく回復しません。そこで朱雀院に仕える延臣が梓弓によって亡霊を呼び寄せる呪法の上手である照日ノ巫女に命じて、怨霊の正体を占わせませす。すると梓の弓の音に引かれて、光源氏の愛人であった六条御息所の生霊が破れ車にのって現れます。そして、光源氏の愛を失った恨みを綿々と述べ、葵上の枕元に立って、責め苛み、幽界へ連れ去ろうとします。

<中入>

臣下はただならぬ様子に、下人呼び、横川ノ小聖という行者のもとへ使いを走らせませす。急ぎ駆けつけた行者が、早速に祈祷を始めると、六条御息所の怨霊が、鬼女の姿で再び現れ、行者を追い返そうとして激しく争います。しかし、その法力には敵わず、ついに祈り伏せられ、悪鬼さながらの怨霊も心を成仏します。

【詞章】（独吟の部分の抜粋）

行者は加持に参らんと。役の行者の跡をつぎ。胎金兩部の峰をわけ。七宝の露をはらいし篠懸に。不浄をへだつる忍辱の袈裟。赤木の数珠のいらたかを。さらりさらりと押しもんで。一祈こそ。祈つたれ。東方に降三世明王。なまくさまんだばさらだ。いかに行者早や帰りたまえ。帰らでふかく。し給うなよ。たとい如何なる悪霊なりとも。行者の法力つくべきかと。重ねて数珠を。おしもんで。東方に降三世明王。東方に降三世明王。南方軍荼利夜叉。西方大威徳明王。北方金剛。夜叉明王。中央大聖。不動明王。なまくさまんだばさらだ。せんだまかろしやな。そわたやうんたらたかんまん。聴我説者得大智慧。智我身者即身成佛。やらやら恐ろしの。般若声や。これまでぞ怨霊。この後又も来たるまじ。誦誦の声を聞く時は。悪鬼心をやわらげ。忍辱慈悲の姿にて。菩薩もここに来現す。成佛得脱の。身となりゆくぞありがたき。身となりゆくぞ。ありがたき。

加茂（かも）

【分類】初番目物（協能） ＊舞働

【作者】金春禪竹

【主人公】前シテ：水汲女（面・増女）、後シテ：別雷の神（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

播州（兵庫県）の室の明神と都の加茂明神とは御一体であるというので、室の明神に使える神職が都へ上り、加茂の社に参詣します。すると、その川辺に新しい壇が築かれ、白木綿に白羽の矢が立ててあります。それを見て、不審に思い、ちょうどそこへ水を汲みにやって来た二人の女に尋ねます。女は「昔、この里に住んでいた秦の氏女が、朝夕この川の水を汲んで、神に手向けた。ある時、川上から白羽の矢が流れてきて水桶に止まったので、持ち帰って家の軒にさしておくと懐胎して男子を産んだ。この子と母、そして白羽の矢で示された別雷〔わけいかづち〕の神を加茂三社の神というのです」と、加茂三社の縁起を語ります。続いて、水を汲みながら川に因んだ歌をひき、その流れの趣を語り、やがて自分が神であることをほのめかして消え失せます。

<中入>

しばらくして、女体の御祖神〔みおやのしん〕が姿を現して舞をまい、続いて別雷の神が出現して、国土を守護する神徳を説き、猛々しい神威を示した後、御祖神は 糺の森へ、別雷の神は虚空へと飛び去っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋です。）

風雨隨時の御空の雲居。風雨隨時の御空の雲居。別雷の雲霧をうがち。光稻妻の稲葉の露にも。宿る程だに鳴る雷の。雨を起して降りくる足音は。ほろほろ。ほろほろとどろとどろと踏みとどろかす。鳴神の鼓の。時もいたれば五穀成就も国土を守護し。治まる時にはこの神徳と。威光を現わしおわしませば。御祖の神は。糺の森に。飛び去り飛び去り入らせたまえばな お立ちそうや雲霧を。別雷の。神も天路によじのぼり。神も天路によじのぼって。虚空にあがらせ給いけり。

室君（むろぎみ）

【分 類】四番目物（夜神楽物・略初番目物） ＊神楽、中ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：韋提希夫人（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

播州（兵庫県）室明神の神職が神事を執り行おうと、室津の遊女たちを神前に集ま
らせたところ、室君達は梅の香が匂う春の夜の興趣を歌いつつ、船に乗ってやって
来ます。神職の命により、棹の歌を歌い、神楽を奏していると、室明神が女体の姿
で現れます。そして、感涙に袖をぬらしていると、夜も明けはじめ、明神は空高く
昇っていくのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

玉のかんざし羅綾のたもと。玉のかんざし羅綾のたもと。風にたなびき瑞雲に乗り。
所は室の。海なれや。山はのぼりて上求菩提の機をすすめ。海はくだりて下化衆生
の相を現し五濁の水も。実相無漏の大海となつて。花降り異香薫じつつ。相好まこ
とに肝に銘じ。感涙袖をうるおせば。はや明けゆくや春の夜の。はや明け方の雲に
のりて。虚空にあがらせ。給いけり。

鵜ノ段（うのだん）〔鵜飼（うかい）〕

【分類】 五番目物（鬼物＝鬼神物） ＊カケリ

【作者】 榎並左衛門五郎原作、世阿弥改作

【主人公】 前シテ：鵜使いの老人（面・三光尉）、後シテ：閻魔王（面・小癡見）

【あらすじ】（『鵜ノ段』の部分…下線部）

安房国（千葉県）の清澄の僧が、甲斐国（山梨県）への行脚を志し、途中、石和川のほとりに着きます。その土地の人に、一夜の宿を頼みますが、旅の者に宿を貸すことは禁制だと断られます。その代わりに、川辺の御堂を教えられ、そこに泊まることにします。するとそこに一人の老人が鵜を休めるために立ち寄ります。僧が、老人なのにいつまでも殺生するのはやめて、他の職業についたらと意見をすると、老人は、自分は若い時からこの仕事で生計を立ててきたので、今さらやめるわけにはいかないと答えます。従僧が、二、三年前にこの地を訪れた時、このような老人に会い、もてなしを受けたと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯したため殺されたと語り、実は自分がその亡霊だと明かします。僧のすすめで亡者は罪業消滅のため鵜飼のさまを見せて消えてゆきます。

<中入>

僧たちはやって来た先刻の土地の者からも、密漁をして殺された男の話を聞き、先ほどの老人こそ鵜使いの化身であったと信じ、法華經の文句を川辺の石に一字ずつ書いて川に沈めて回向します。すると地獄の鬼が現れて、かの鵜使いは地獄へ落ちるはずであったが、生前、僧を接待した功德と、法華經の効力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げ、法華經のありがたさをたたえます。

【詞章】（『鵜ノ段』の部分の抜粋）

湿る松明振り立てて。藤の衣の玉襷。鵜籠を開き取り出し。鳥つ巢おろす荒鵜ども。
この川波に。ぱっと。放せば。おもしろの有様や。おもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追ひ回し。潜きあげ掬いあげ。隙なく魚を食う時は。罪も報いも後の世も。忘れ果てて面白や。みなぎる水の淀ならば。生け簀の鯉やのぼらん。玉島川にあらねども。小鮎さ走るせぜらぎに。かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の。燃えても影の暗くなるは。思い出でたり。月になりゆく悲しきよ。鵜舟のかがり影消えて。閻路に迷うこの身の。名残惜しきを如何にせん。名残惜しきを。如何にせん。

山姥（やまんば）

【分類】 四・五番目物（略脇能物＝妖怪物） ＊カケリ

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：山の女（面・曲見）、後シテ：鬼女（面・山姥）

【あらすじ】（今回の仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

京都に、山姥の山巡りの曲舞を得意としたので、百万山姥と仇名されていた遊女がありました。彼女は、善光寺参詣を思い立ち、従者をつれて旅に出ます。途中、越中国（富山県）・越後国（新潟県）の国境の境川まで来ます。従者は里の男を呼び出し、善光寺への道を尋ねると、男は三つの道があるが、そのうち最も険難ではあるが、阿弥陀如来が通られたという上路越をすすめ、自分が道案内をしようと言います。遊女も乗り物を捨て、徒歩で後について行きます。しばらく進むと、にわかにあたりが暗くなり、一行は当惑します。すると、一人の女が現れ、宿を貸そうといい、自分の庵へと案内します。そしてその女は、山姥の歌を聞かせてほしいと頼みます。遊女の事や山姥の曲舞の事をよく知っているので、一行の者が不思議に思っ、名を尋ねると、自分こそ山姥であると明かし、夜更けてから歌ってくれたら、もう一度姿を現して、歌に合わせて舞おうと告げて消え失せます。

<中入>

里の男は、従者に問われるまま、山姥の素性について、いろいろ物語ります。やがて夜も更けたので、遊女が笛を吹いて待ち受けると、山姥が怪異な姿で現われます。山姥に促されて、遊女は恐れながら謡い始めると山姥もそれに合わせて舞います。そして深山の光景、山姥の境涯を物語り、さらに春夏秋冬に、花月雪をたずねて山巡りする様を見せた後、いずくともなく去っていきます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

暇申して帰る山の。春は梢に咲くかと待ちし。花を尋ねて山めぐり。秋はきやけき影を尋ねて。月見る方にと山めぐり。冬は冴えゆく時雨の雲の。雪をさそいて山めぐり。めぐりめぐりて輪廻を離れぬ妄執の雲の。塵積もって。山姥となれる。鬼女が有様見るや見るやと。峰にかけり。谷に響きて今までここに。あるよと見えしが山また山に。山めぐり。山また山に。山めぐりして。行方も知らず。なりにけり。

殺生石（せっしょうせき）

【分類】五番目物（切能＝鬼畜物）

【作者】日吉安清

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、後シテ：野干の精（面・小飛出）

【あらすじ】（独吟〔キリ〕…下線部）

玄翁という高僧が、能力と奥州から都へ上る途中、下野国（栃木県）那須野の原へさしかかります。空を飛ぶ鳥が、とある石の上を飛ぶと落ちるので、不審に思っ
て見ていると、一人の里の女が現れ、その石は殺生石といい、人畜を害する恐ろしい
石だから、近寄らないようにと注意します。玄翁がその由来を尋ねると、女は次の
ような話をします。昔、鳥羽院につかえていた玉藻ノ前は、才色兼備の女性で、帝
もお気に入りであったが、実は化生の者であった。帝を悩ませようと近づいたが、
その正体を見破られたのでこの野に逃げたが、殺されたため、その魂が殺生石にな
ったのだと詳しく語ります。そして、実は自分はその石の魂であるとあかし、夜に
なれば懺悔のため姿を現すと言いつつ、石の中に隠れます。

<中入>

玄翁が石に向かって仏事をなし、引導を与えると、石は二つに割れ、中から野干（狐）
が現れます。野干は、天竺（インド）では斑足太子の塚の神、大唐（中国）では幽
王の後褒姒となって世を乱し、日本へ渡り、この国をも滅ぼそうと玉藻ノ前という
美女に変じて宮廷に上ったが、安倍泰成の祈祷で都を追われ、その後、この野に隠
れ住んだが、狩り出されて遂には射殺され、その執心が殺生石となっていたのでし
た。しかし、野干（狐）は、今、あなたの供養を受けたので、以後、悪事はしないと
誓って消え失せます。

【詞章】（独吟〔キリ〕の部分の抜粋）

その後勅使たつて。その後勅使たつて。三浦の介。上総の介。兩人に綸旨をなされ
つつ。那須野の化生のものを。退治せよとの勅を受けて。野干は犬に似たれば。犬
にて稽古あるべしとて。百日犬をぞ射たりける。これ犬追物の始とかや。兩介は狩
装束にて。兩介は狩装束にて。数万騎那須野をとりこめて草を分かつて狩りけるに。
身をなにと那須野の原に。現われ出ざるを狩人の。追つまくつつきくりにつけて。
矢の下に射つ伏せられて。即時に命をいたずらに。那須野の原の露と消えても。な
お執心は。この野に残って。殺生石となって。人をとること多年なれども。今会い
がたきみ法を受けて。この後悪事をいたす事。あるべからずとおん僧に。約束かた
き石となって。約束かたき。石となって。鬼神の姿は。失せにけり。

千手（せんじゅ）

【分類】 三番目物（現在鬘物） *序ノ舞
【主人公】 シテ：千手の前（面・増女、小面ニモ）
【作者】 金春禅竹

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

平重衡は、平清盛の五男で、一の谷の合戦では、大手（正面）の陣となった生田ノ森方面の副将でしたが、戦に敗れ、捕われて鎌倉に護送されます。鎌倉では狩野介宗茂に預けられ、幽囚の身で世の無常を嘆いています。源頼朝は、この若く凛々しい平家の御曹子に少なからず同情を寄せ、自分の侍女で、手越ノ宿の長者の娘である千手の前をつかわし、後いくばくもない命のつれづれを慰めます。ある春の雨の降る夜、宗茂は重衡に酒を勧めようとやって来ます。そこへ千手も琵琶を持って訪れます。重衡は、先日、千手を通じて頼朝に願い出てあった出家の望みがかなわぬことを告げられ、これもまた、父清盛の命令とはいいいながら、南都（奈良）の仏寺を焼いた罪業の報いかと嘆きます。千手は重衡の心中を思いやり、酒の酌をし、朗詠を謡い、舞を舞って、心を引き立たせようとします。重衡も興にのって、琵琶を弾くと、千手も琴を合わせ、夜の更けるまで、つかの間の小宴を楽しみますが、翌朝、重衡は勅命によって、また都へ送り帰されることになり、鎌倉を出立します。千手は、その後姿を涙ながらに見送るのでした。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

今は梓弓。よし力なし重衡も。引かんとするにいず方も。網を置きたるごとくにて。のがれかねたる淀鯉の。生捕られつつ川越の。茂房が手に渡り。心のほかの都入り。げにや世の中は。定めなきかな神無月。時雨降りおく奈良坂や。衆徒の手に渡りなば。とにもかくにも果てはせで。また鎌倉に渡さるる。ここはいづくぞ八つ橋の。雲居の都。いつかまた。三河の国や遠江。足柄箱根うち過ぎて。明けもやすらん星月夜。鎌倉山に入りしかば。憂き限りぞと思いに。馴るればここも忍びねに。哀れ昔を思い妻の。灯暗うしては。数行虞氏が涙の。雨さえしきる夜の空。四面に楚歌の声の内。何とか返す舞の袖。思いの色にや出でぬらん。涙を添えてめぐらすも。雪のふるえの枯れてだに花咲く。千手の袖ならば。重ねていざや返さん。

岩船（いわふね）

【分類】 初番目物（脇能＝荒神物）

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：童子（面・童子）、後シテ：龍神（面・黒髭（泥小飛出））

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

時の帝が摂津国（大阪府）住吉の浦に、新たに浜の市を開き、高麗や唐土の宝物を買い取るようにとの宣旨を下されます。そこで、命を受けた勅使が住吉へ下向します。すると、そこへ姿は唐人ながら、日本語を話す一人の童子が、銀盤に宝珠を乗せて現れます。勅使が不審に思って問いかけると、童子はめでたい御代を寿いで来た^と告げ、また、この宝珠も君に捧げたい、龍女の珠とでも思っていた^{だけ}ればありがたいと言います。そして、住吉の浜に立ついろいろな市のことなどを語ります。また、このあたりの景色をめで、さらに天がこのめでたい代をたたえて、極楽の宝物を降らすために、岩船に積み、今、ここへ漕ぎ寄せるところだと言います。そして、自分こそは、その岩船を漕ぐ天ノ探女であると明かして消え失せます。

<中入>

続いて、海中に住む龍神が、宝を積んだ岩船を守護するために現れます。そして、龍神は八大龍王達も呼び寄せ、力を合わせて岩船の綱手を引き寄せ、住吉の岸に無事に到着させます。山のように積まれた金銀珠玉は、御代の栄を寿ぐように光輝きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

宝をよする波の鼓。拍子を揃えてえいやえいや。えいさらえいさ。引けや岩船。天の探女か。波の腰鼓。ていとうの拍子を。打つなりやさざら波。えめぐりめぐりて。住吉の松の風。吹き寄せやえいさ。えいさらえいさと。押すや唐簾の。押すや唐簾の潮も満ち来る。波にのって。八大龍王は。海上に飛行し。御船の綱手を手に繰りからまき。潮に引かれ。波にのって。長居もめでたき住吉の岸に。宝の御船を着け納め。数も数万の捧げ物。運び出だすや心のごとく。金銀珠玉は降り満ちて。山のごとくに津守の浦の。君を守りの神は千代まで。栄うる御代とぞ。なりにける。

絃上（けんじょう）

【分類】四・五番目物（貴人物、略脇能） ＊早舞

【作者】不詳（金剛弥五郎？）

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉または三光尉）、
後シテ：村上天皇の霊（面・中将）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

時の太政大臣藤原師長は、天下に隠れもない琵琶の名手です。もはやわが国にはライバルはいないと思い、唐（中国）に渡ってさらにその奥義を窮めようと、従者を伴い、都を出て須磨の浦までやって来ます。そこで、一夜の宿を借りた塩屋の主の望みに応じて、師長が一曲弾っていると、にわかにか雨が降り来り、板庇を打ちます。すると老夫婦が、苫を取り出して板屋を葺いて調子を整えます。師長はその措置に驚き、音曲に嗜みのある者と見て、一曲を所望します。すると翁は琵琶、姥は琴によって越天楽を合奏します。師長はその神技に感じ、国内に自分より優れた弾き手はいないと思いがったことを深く恥じて、立ち去ろうとします。老夫婦はこれを引き止め、自分達は村上天皇と梨壺女御の霊であり、師長の入唐を止めるために現れたのだと述べて姿を消します。

<中入>

やがて村上天皇の霊が神々しい装束で現れ、龍神に命じて、竜宮に持ち去られた獅子丸の琵琶を取り寄せ、これを師長に下賜します。そして自らも、興に乗じて秘曲を奏で、舞を舞って昇天します。師長は、何よりの土産と名器をたずさえて都に戻ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

獅子には文殊やめさるらん。獅子には文殊やめさるらん。帝は飛行の車に乗じ。八大竜馬に引かれたまえば。師長も飛馬にむちをあげて。馬上に琵琶をたずさえて。馬上に琵琶をたずさえて。須磨の帰洛ぞ。ありがたき。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実験的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓:台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子〔すばやし〕

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子〔ばんばやし〕

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事〔まいごと〕…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽〔がく〕: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓〔かっこ〕: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事〔はたらきごと〕…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。
精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。
「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働〔まいばたらき〕: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。
働〔はたらき〕ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>